

第二回星野立子新人賞

「一秋四冬」

若杉 朋哉

もかもふりはらひたるすゝきかな
からだから曼珠沙華こそ出でにけれ
鬼灯に話しかけたる人のあり
秋雨にうづくまりたる猫二三
秋の日に手水を巡る浮葉かな
十月や悔ゆる心の透きとほる
つよき日にゆれてたのしきあきざくら
秋桜夕日はげしき家の中
残菊や薄日のさしているところ
もつれたるすゝきつぎつぎほどけたり
煤煙のゆく冬の日の肌ざわり
短日や水に挿さりて曲る棒
ものおもふこともなくなり枇杷の花
枇杷の花三十九年のわだかまり
忘れたることもよきかな冬すゝき
木の葉からひかりはがれてゆくところ
しぐるゝや生き長らえし菊の顔
しぐるゝやとぎれとぎれの話なり
花八手こまごまと身のまわりかな
日が落ちるほうを向きたる枯柳
冬の日のやや声高になりけり
あぢきなき昼ひたひたや凍豆腐
木枯しのなかつぶやきも失せにけり
木枯しのさわぎたる日も終ひけり
煮つまりしおでんに唄ふむかしかな

はやぶさのこゑ吹きちぎる河原かな
そだてたる焚火に一言三言かな
夕浜のこゑうらがへる焚火かな
着ぶくれて達磨のごとくいばりけり
着ぶくれて日向の匂ひする児かな
足袋ぬぎしままの形のくらしかな
たてかけてある雨傘の寒さかな
人の背のかげまばらなる寒さかな
のびきりしうどん啜れる寒さかな
いふこともなくて夜明けける寒さかな
寒き雨つたふ枝より落ちにけり
ちりぢりに語り初めたる小雪かな
雪止まぬ日の山畑のかぎりなし
遠山に真つ平なる冬田かな
一月のあらわになりし山の墓
悴みて往来を行く犬の顔
冬の日のついでむ小鳥こちら向く
ありがたく日に拝みたる冬の蠅
おりからの一ト雨はしる冬野かな
夕凍(ゆふじみ)てうしろぐらさのつりけり
降る雪のいつか後ろにありにけり
降りしきる雪のほかに赤味かな
雪の日のほそぼそとつぐはなしかな
枝になほすがりつきたる雪もあり
忘れたきことあまたあり冬の山